

今月の選評 酒井哲哉 東京大学教授

私たちは「戦後」を知らない

論

壇の大半が戦後生まれの論者によって構成されるようになった現在、戦中と戦後

の間で人々が何をどのように考えてきたかを問うことは、もはやタブーではないのかもしれない。事実、戦中期の知識人の言説を同時代の知的文脈において検討する試みは、近年の流行といってもよいほどである。だが、こうした研究成果が積み上げられるにつれて、肝心の「戦後」とはどのような時代であったのか、という問いが再び浮上してくるのも抑えがたい。本書は、これまで戦前期日本の言説構造を犀利に分析してきた著者が、改めて戦後日本におけるナショナリズムと公共性をめぐる議論の変容を検討した著作である。戦後日本における単一民族神話の虚構性を突く議論を展開してきた著者の戦後思想史像は、果たしていかなるものであろうか。

著者は「悔恨共同体」としての戦後思想を、論者の戦争体験のあり方に則して忠実に再現していく、というきわめて正攻法の接近方法により検証していく。著者があえてこうした手法をとる背景には、戦後思想を取り上げる現在の論者たちがしばしば過度に単純化された戦後思想像をもとに議論を進めていくことに対する違和感があるように思われる。近過去については、根拠のないまま現在の関心からの思い込みで立論がなされやすいが、思い込みの上にさらに思い込みを重ねるような論争の構図が、次第に「戦後」という時代の実像から論者を遠ざけることになった感はある。本書の帯に描かれた、「私たちは「戦後」を知らない」というフレーズは、そうした空回りした状況をよく表している。

「戦後民主主義」という用語が六〇年安保以後汎用されるようになったことに象徴されるように、従来の戦後思想

<民主>と<愛国>——戦後日本のナショナリズムと公共性

小熊英二著 ● 新曜社 ● 2002年10月 ● 966頁 ● 6300円 (本体)

論は無自覚のまま六〇年安保期の党派对立を逆投影させることにより成立している。それゆえ、著者の視線は、世代・地域・階層によって異なる戦争体験から生じる心情を、終戦時から順次展開される議論の中に読みとっていく方向へ注がれていく。総力戦体制の機能不全と新たなナショナリズムの模索という戦中期の状況を前提に出発した

戦後思想は、本来ナショナリズムと民主主義の結合を課題としたものであった。したがって、一九五〇年代半ばまでの論調は、「民族」シンボルを左右両翼で争奪する構図を持っていた。この背景には、戦争体験とともに、都市と農村、知識人と大衆といった激しい階層格差があり、それが「国民的連帯」の主張に生命を与えていた。このような構図が崩れるようになるのが、高度成長以後の社会構造の変容であり、戦

中期に青少年であった世代によるいささか単純化された戦後思想批判であった。著者はこのようなマクロな見取り図の中に、丸山眞男から小田実までの議論を詳細に検討している。

著者の作品が常にそうであるように、本書もまた大胆な構図と入念な細部を兼ね備えた著作であり、読者はそこでさまざまな発見をすることであろう。評者の感想をいえば、もはや忘れられた国民的歴史学や戦後の教育運動の再検討もさることながら、著者が、主として六〇年代に青年期を迎えた世代の論者たちを論争の対象としているせいか、六〇年代に脚光を浴びた吉本隆明はさんだ前後の世代の対照が興味深かった。とまれ、およそ戦後思想を振り返る際に踏まえておかねばならないことを明快に提示した作品として、本書は今後読み継がれていくことであろう。

